
鐘がなる夜

月島愛夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鐘がなる夜

【Zコード】

Z0286D

【作者名】

月島愛夜

【あらすじ】

『この世に残る、意味がない』 そうつぶやいた沙里は、このときにもう、何もかも、失っていた。未来も、そして絶望も。絶望することさえ、忘れていたのだ。わずか十四歳の少女の身の回りで起きた事とは。そして、少女が犯した罪は・・・。中編リアリティ小説。人は時に、絶望さえも失ってしまう。

プロローグ（前書き）

短編では少なからぬなと思い、連載にいたしました。
ぱつと思い浮かんだので書いてみました。
そんなに長い小説ではないので、淡々と読んでいただければなと思
います。

プロローグ

黒い長い髪を、三つ編みに結つて、少女はマンションの屋上で、立ち廻っていた。

まるで、この世の終わりを見つめるようだ。

その時、足音が聞こえた。

急ぐように、階段を上つてくる音。少女は扉の方をゆっくり回った。

青年が、息を荒く吐きながら、少女を凝視する。

「何・・やつてんだよ」

青年がそう言つた時、少女は軽く笑つた。

そして、喋りだす。

「この世から、居なくなつても、いいですか」

この少女の身の回りで、歯車が音を立てて崩れだしたのは、約三ヶ月前の事。その時から、何かが狂つていたんだ。この少女も、そしてこの青年の未来も・・・・・。

1・事件（前書き）

これは作者がネガティブな心になつた時に度々更新します
ですので、「了承ください」。

「母さん?」

漆黒の美しい艶やかな髪を、腰に届くか位に伸ばしていた信田沙里^{シノダシリ}は、一つの家の前で、ただ立っていた。いや、足が動かなかつたのかもしれない。田の前にある、あまり大きいとはいえないこの一軒家は、沙里の自宅である。

十四歳である彼女は、中学校から帰つて、いつものように本屋へ行つて本を買った後、自宅へ帰つてくるとの^{ザマ}様だ。

沙里は学校から帰るといつも、財布だけを握り締めて本屋へ行く。その理由は、両親にあった。現在沙里は、母親の元で暮らしている。父親とは別居中。毎日喧嘩、そして暴力の繰り返しだ。そしてやつと一ヵ月前に別居したのだ。

もつと早く離れれば良かつたのに、と沙里は思つてならない。それに特別、離れている父とも、会いたいとも思わない。といふか、会いたくない気持ちの方がだいぶと強いのだ。

だが、今でも母親の暴力は続いている。それを甘んじて受ける必要などはないし、家の中には色々とやつかいことが多い。だから、外に出て少しでも家の中にはじくことを少なくしようと思つているのだ。

そして今起きている事が、沙里の頭の中で整理できていない。事件があつた時特有の空氣と、そしていつも事件などで見られる黄色いテープが、自分の家中に張り巡らされているのだ。果然とその景色を見ていると、若い、まだ二十歳後半の男性だらうか。少し栗色の頭の警官が、沙里に喋りかけてきた。

「お嬢ちゃん、こここの関係者かな」

関係ないなら傍に来ないでと忠告しに来たつもりなのか。にこりと微笑んだ警官は、自分をどこかにやろうとしているのだと分かる。

「関係者です」

はつきりそう答えると、警官は少し驚いた顔をし、問いただす。

「お名前は」

「信田沙里。」この家の一人娘ですけど……何があつたんですか」
淡々とした表情で喋っている少女に、警官はさぞ驚いただろ。少し困った顔をする。

だがこれでも中学生だ。」ついさからさまな態度が苛々を募らせる。

「さつさと答えてください。疑ってるんなら検査でもしたらどうですか」

「えっとね、ちょっと落ち着いてね」

「落ち着いてますけど……あなたの方がよっぽどオロオロしますからね」

沙里が少し強い口調で言つたこと、警官は口を濁しながらも少しだけ喋りだす。

「事件だよ。殺人事件だ」

『殺人』。人を殺すと書く。沙里はぼんやりと死という文字を頭に浮かべた。

「じゃあ、家に居た、母は死んだんですね」

家にいたのは母親一人だ。警官は顔を歪め、はつきりと喋るこの日の前の子供が信じられないんだろうか。だが警察だつて死人を見ても別になんとも思つていらないだろうと沙里は考える。

「ああ」

だがそう答えたこの若い警官は、沙里よりよっぽど悲しそうに見える。自分でもなぜ『悲しんでいないのだろう』と思つてしまつ。

だつて、悲しくないから。そりやあ親だし、一応「ああ残念」とは思つてゐるがただそれだけ。他に思うことなんて何も無い。

それに、今でさえ、生きている実感などないのだ。もしかしたらすべてが夢で、自分は生きてさえいないかも知れないという幻想まで描いている。

「大丈夫かい」

警官が低くつぶやくと、沙里せり、と答えそうになつた。親が死んだのに、うんといつ子供はいらないだろ？。変わつてゐるとは思われたくない。

沙里は黙つて地面に立つてゐる、自分の足と靴を見つめた。その姿を見ると、なぜか警官は安心したように頭をなでてきた。

「あの、あんまり触らないで下せ」

ぴしゃっと命令口調でいふと警官は法んだよつに手を離した。

その後、沙里は警察の中へと連れて行かれた。あれからあの警官とは何も喋らず、黙つたまま車へ乗せられた。

「どうでもいい。

そう思つていたから、沙里が反論も、講義も何もしなかつた。きっと、明日にはテレビで報道されるのだろう。その時、どんな反応をしようか。

沙里はそれしか考えていなかつた。

「IJの子が

若い警官は、おそらく上官だらう女の人へ、少し声を押さえ氣味にしながら話す。

「はい、被害者のお嬢さんです。けど、少し変わつていて。泣きも喚きもしないんですよ」

女的人は困つたように沙里を見る。哀れむように見られると、自分は可哀相なのか、と初めて分かる。

女の人があため息をつき、沙里が座つている椅子の、反対側にある椅子に腰掛ける。机を前にして、出されているお茶に手も出さず、ただ見つめている沙里を不審に思つたのか、女は沙里に微笑みながら飲んでいいよ、とつぶやく。

「結構です。別に欲しくありませんから。それより、私はいつまでここに居なければいけないんですか」

笑いもせず、悲しみの色も見せない沙里を、女は可哀相に思つたる。きっと、『悲しすぎて、心を失つたのだわ』と。

「どこかいくあてはあるの?」

「別にありません」

男の方が、女の耳元で何か小声で喋つた。女は沙里に向き直り、微笑みながら沙里と向かつ。

「あなたは、父親がいるらしいわね。そこへ行けば安心よ」
沙里は意外そうにその話を聞き、鼻で笑つたように口元をゆがませる。

「あの男が、私を受け取るとでも？そんなことするはずがない。安心だつて？安心なんて言葉、気休めにもならない」

女と男は顔を見合わせ、先ほどよりも困つたような顔をする。

「別に、あなた方には関係ありませんから。困らなくていいですよ。これは私個人の問題だから関わらないで下さい」

十四歳の中学生が言つ言葉とは思えぬほど、はつきりと、そして淡々と語る。

するとまた違う男の警官が入つてきて、上官の女に耳打ちする。すると女の顔が少し明るくなり、取調べ室の扉を開ける。

「どうぞ、こちらへ」

その声が、ただじつとして待つてゐる沙里にも聞こえた。

「お嬢さん。この方、知つてる？」

女の警官が手招きして取調べ室に迎えた人間は、顔には少し皺があり、とてもだが若いとは言えない様な女人だつた。ぽつちやりとした体型に、どこにでもいそうな顔。そしておそらく五十代ぐらい。

「分かりません」

沙里はそつぽを向いたまま、そのおばさんの方もろくに見ずに、答える。

「無理もないわ。あつたのは五歳の時だもの」

おばさんは苦笑する。

別に何歳に会つていよつが、そんな特徴のない顔、覚えてないと、沙里は心の中だけで思つ。

「それで、この用件は」

沙里は向きを直し、おばさんの方を見た。おばさんの瞳に集中しどんな瞳の動きも見逃さないよつに、それこそ食つてしまつのではないかと言つほど、見つめる。女の警官は笑顔でその光景を見てい

る。

「私の名前は津川多恵子。小さい時に近所だったの。今日はちょっと引越しの用事でこっちに来たんですけどね・・・殺人事件があつたって・・報告を受けて」

多恵子と名乗った女性は、はらはらとまるでドラマでも見ているのかと思うほど、嘘っぽく涙を流す。

だがそれに気づいてないのか、回りの警官は残念そうに目を伏せる。

「気になつて寄つてみたら、知り合いじゃないの。で、聞いたところによると殺害されたのは母親だけで、子供は生きてるつて。だから急いでここに来たの」

いつまでその演技をし続けるつもりか。いや、演技ではない。彼女自身、夢を見てるだけなのだ。この年頃の女性は、ドラマをよく見る。それ出てくる人間は警察と、そして死んだものとその遺族。それを支える人間達。

よくあるドラマの内容だ。だから彼女は近くはその、支える人間達の役をしようとしているのだ。

彼女の勝手な妄想だ。

『この子の母親は死んだ。きっと支える人間はいない。だったら私が支えなければ、彼女はかわいそなのだから』

馬鹿な人間。

沙里は声を出して笑い出す。多恵子は目を丸くして沙里を見つめる。自分はいい事をしているのに、なぜこの子は笑っているのかとでも言つよう。

「それで、ご用件は」

すぐに元の無表情な顔に戻し、沙里は問う。

「あなたを、私の家で預かるつと思うの。三人家族でね。息子が一人と主人がいるの。来て・・くれるわよね」

やはり、か。

言つている意味が、この女は分かつてない。私の事を預かるとい

う本当の意味を。

「はい。行かせてもらいます」

にやりと微笑んだその顔を、多恵子は微笑んだととつて、にこや

かに笑う。

さあ・・・楽しいゲームのスタートだ。

2・偽善者（後書き）

試験前ですけど書いてみた。
またしばらく更新はできないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286d/>

鐘がなる夜

2010年10月12日21時50分発行